

# 緑のエッセー

「うさぎおいしかの山 こぶなつりしかの川」は、作詞高野辰之(長野県)、作曲は定かでないと言われていますが岡野貞一の、大正三年から歌い継がれてきた小学校唱歌「ふるさと」の一節です。生まれ故郷から離れ、遠くの土地で勉学や勤労に励む中で、故郷の風景を懐かしむもので、特に、高度経済成長期の集団就職など都市への一極集中が進む中で多くの人々に親しまれた歌でした。ところが、今、ふるさとの無い子ども達が増加しています。

私は、一九七〇年代の初めに、窮屈で、お節介な故郷から「卒業したら必ず帰る」と父親を説得して東京農業大学に入学しました。卒業の段階になって「も

う少し東京に居させてほしい」ということで、今に至っているわけです。その時、親父は「東京で一生懸命にやれ、もし挫折するようなことがあれば戻って百姓をやれ」といわれました。七〇年代の中頃は、木材価格もスギ丸太で一立方当たり三万円台をつけ、農産物もコンニャク・養蚕などもそれなりの価格をつけておりました。厳しい中でも農林業で何とかやっていける時代でもあったのです。ところが、八〇年代に入り、七〇歳を過ぎた頃「もう戻って来るな、戻ってもやってゆけないから」といわれたことを思い出します。市場開放によって安い農林産物の輸入拡大の影響を受け、木材価格が一立方二万円代に

暴落し、コンニャクや生糸も大きく暴落してしました。この時、私は故郷を失うこととなります。それまでは、何か仕事上で大きな失敗をしても帰るところがあった。ところがそれ以降帰るところを失うことになりました。その時、何とも寂しい気持ちになりました。故郷とは、その人の生きる支えであり、励みであるのではないか。仕事に行き詰まり、挫折しそうになったとき、あるいはストレスがたまって体力が衰えたときなど、故郷の山々や川は、優しくねぎらい、英気を養ってくれるものでした。そこには里山文化が培われ、ある時は生業の資材を、ある時は家屋・田畑を地滑りから守り、また、集落の



危機を救い、そしてある時は人々の心を育む「ふるさと力」が力強く人の心を見守っていました。

ところが、そのふるさとが日本から消えようとしています。わが国には森林を源とする一三九五〇に及ぶ一級河川が山地を下り、多数の河川と合流しながらふるさとを潤し、大海へと注いでいます。ところがその緑豊かな山紫水明の源流域は、この一〇〇年あまりの間に、市場経済を優先した急速な資本主義の発展に伴って、五〇年代からダムに沈み、七〇年代に薪炭林からスギ・ヒノキの人工林に変わり、八〇年代は安い外国製品の輸入拡大等によって木材価格がさらに下落することで、手入れ不足の森林が

増加しています。今日は、木質バイオマス利用の推進等から森林・林業基本計画によって自給率五〇%を目指して伐採が進められています。源流域の森林は依然として管理できない森林が増加して荒廃が進む傾向にあります。それはすなわち、日本の原点であるふるさとをつぶすことになりかねません。

一月二五日には、「源流は命の源 川でつながる豊かな暮らし」として木曾川の上下流連携フォーラムが開催され、上下流域のみんなが源流域を守ることが宣言されました。また、来る三月八日〜九日は、全国植樹祭発祥の地である筑波山において、「山が荒れると人心も荒れる」という先人の教えに学び、「森の

## プロフィール

- 昭和28年 長野県生まれ
- 昭和50年 東京農業大学農学部林学科卒業
- 平成12年 東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科教授(現在に至る)
- 平成19年 東京農業大学大学院農学研究科林学専攻指導教授(現在に至る)
- 平成20年 東京農業大学地域環境学部 学部長(平成24年3月31日)
- 平成24年 東京農業大学大学院農学研究科林学専攻主任(現在に至る)
- 【図書】  
『森林づくり活動の評価手法・企業などの森林づくりに向けて』(編著 全国林業改良普及協会、『日本の農林水産業 林業』監修(鈴木出版)など。

力と知恵・道普請プロジェクト」が行われます。

こうした流域の動きは、緑豊かで、健全な国土を創り、安心・安全で健康的な暮らしをもとめ、元氣なふるさとを再生する国民運動につながるものです。

唱歌ふるさと「やまはあをき ふるさと みずはきよき ふるさと」で結んでいます。一〇〇年後の日本は、急速な人口減少と経済の縮小が予測されています。そのときに緑豊かな、元氣なふるさとを構築することが課題といえます。森づくりは百年の計といわれます。今から元氣な森づくりをスタートしないと手遅れになります。ふるさと再生は源流域の森の再生が課題です。